

紹介 国際連盟経済情報局(著)
(佐藤純訳)『世界貿易のネットワーク』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡辺, 昭一 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24973

紹介

国際連盟経済情報局（著）（佐藤純訳）

『世界貿易のネットワーク』

（創成社、2021 年、定価 2500 円＋税）

渡 辺 昭 一

本著は、国際連盟経済情報局によって刊行された *Europe's Trade : A Study of European Countries with Each Other and with the Rest of the World* (League of Nations, Genova, 1941) とその姉妹編 *The Network of Word Trade : A Companion Volume to 'Europe's Trade* (League of Nations, Genova, 1942) の 2 冊を一つにして翻訳したものである。前者は、ヨーロッパの貿易を、後者は、世界貿易ネットワークおよびその決済構造を取り扱ったもので、多くの研究では、これまで主に後者に関心が注がれ、前者にあまり注目されることは少なかったように思われる。両者の情報を総合的に確認できることは、両大戦間期におけるイギリスを含めヨーロッパ大陸を中心とした貿易構造を知るうえで便利な著書である。

分析の対象とする「ヨーロッパ」諸国について、以下のように確定している。アルバニア、オーストリア、ベルギー・ルクセンブルク、ブルガリア、チェコ・スロバキア、デンマーク、エストニア、フィンランド、フランス、ドイツ、ギリシア、ハンガリー、アイスランド、アイルランド、イタリア、ラトヴィア、リトアニア、マルタ、オランダ、ノルウェー、ダンツィヒ自由市、ポルトガル、ルーマニア、スペイン、スウェーデン、スイス、トルコ、イギリス、ユーゴスラヴィア、その他いくつかの小国である。トルコを含めているがソ連を除外している。そのうち、「ヨーロッパの工業国」として、オーストリア、チェコ・スロバキア、ベルギー、フランス、ドイツ、イタリア、オランダ、スウェーデン、スイス、イギリスの 10 カ国を想定しているが、その他の非工業国とを区別する基準は必ずしも明確ではない。また、統計の指標には比較的変動の少ない年として、1928 年、1935 年、1938 年を取り挙げている。

さて、本著は、この 2 冊について前者を第 I 部、後者を第 II 部として翻訳されているが、目次を挙げれば、以下のような構成となっている。

第 I 部 「ヨーロッパの貿易」

第 1 章 序文

第 2 章 ヨーロッパの貿易：規模と構造

- ヨーロッパの貿易の重要性、輸入額と輸出額、各品目グループの貿易、
- 第3章 ヨーロッパの域内・域外貿易
域内貿易と域外貿易、各グループの貿易
- 第4章 帝国貿易
- 第5章 ヨーロッパの貿易収支
輸入超過の決済、貿易収支のネットワーク
- 第6章 ヨーロッパ諸国の貿易相手と貿易収支の状況
イギリス、ドイツ、フランス、イタリア、その他工業諸国、スカンディナヴィア・バルト諸国、東・東南アジア農業諸国、その他ヨーロッパ諸国
- 第7章 各種産品から見るヨーロッパの貿易
食料・飼料および肥料、工業用原料
- 第8章 1930年代の貿易動向
- 第II部 「世界貿易のネットワーク」
- 第9章 調査結果の要約
- 第10章 分析の目的と方法
- 第11章 世界貿易の規模と構造
世界全体の貿易額、世界貿易の構造、主要産品の貿易状況
- 第12章 世界各地の貿易関係
大陸グループ間およびグループ内の貿易関係、各地域の貿易関係
- 第13章 「英米グループ」の貿易
- 第14章 多角的貿易システム
序言、各国・地域の貿易収支、貿易収支の世界システム、多角的貿易システムの形成史、多角的貿易システムの機能、多角的貿易システムの衰退、多角的貿易システムの未来

第I部は、世界貿易におけるヨーロッパの役割、ヨーロッパの域外市場との相互依存の度合い、ヨーロッパにとっての帝国貿易の重要性を考察することを目的としている。第1章から第8章までの論理展開についてみると、第1章では、1930年代において最も標準的な貿易動向を示している1935年のデータをもとに概要を確認し、第2章から第7章ではヨーロッパの貿易の額、取引先、収支構造などを検討し、それを踏まえて第8章で1930年代の貿易動向を総括するという構成をとっている。本書は、巻末に詳細なデータを添付し、それを簡潔にまとめた図表でも図29枚と表117枚にものぼっているため、紙面の都合上一つ一つ紹介することが難しいので、各章の要点を箇条書きにして紹介しておく。

(1) 第二次世界大戦前におけるヨーロッパの貿易額は、世界全体の 50% 以上を占め、その輸入構成が、食糧 28%、原料・半製品 45%、工業製品 27%、輸出構成が、工業製品 57%、原料と半製品 25% となっていた。世界貿易の中でヨーロッパを総体としてみた場合、「世界の工場」として食糧・原料を輸入して工業製品を輸出するという工業国型貿易構造を示していた。

(2) 1935 年におけるヨーロッパは、域外からの輸入 46%、域外への輸出 35% であったが、この輸入超過の半分以上をイギリスが占め、輸入超過（食糧）を海外投資収益及びサービス収益の黒字によって補填する決済構造をとっていた。ヨーロッパの工業国に限定した場合のイギリスの占有率は、輸入食糧の 66%、原料・半製品の 33% を、また純輸出の 36% となっているが、イギリスはもともと帝国との貿易額が大きく、1930 年代においては帝国貿易の重要性を増していた。

(4) 大陸ヨーロッパ域内の農業国は、その域内工業国に対して一次産品を十分充足できない状況にあり、ヨーロッパ全体の貿易に占める割合をみると、輸入 17%、輸出 19% と小さい。そのため域外からの一次産品（原料）輸入に大きく依存していた。ただしイギリスを除外すると、域内農業国は、その輸入総額において域内工業国にかなり依存している。ヨーロッパ域内での工業国と農業国との関係は密であった。

(5) 植民地貿易は、ほぼ宗主国であるヨーロッパ工業国との比率が圧倒的であり、その重要性を増しているが、ヨーロッパとの政治的関係の薄い地域は、輸入 25%、輸出 17% と、対ヨーロッパとの貿易の比率が小さい。

(6) 1930 年代の貿易動向について、1935 年時点でのヨーロッパ貿易の域外地域との関係をより明確に把握するうえで、イギリス・アイルランドと大陸ヨーロッパ（工業国と農業国）とを区分して比較している。動物性食品について、前者が大幅な入超に対して、後者が大幅な出超であること（木材とバルブも同様な傾向）、逆に石炭とコークスについては、前者が出超で、後者が入超であること、また、入超品目でも前者よりも後者がその比率が大きいことに注目している。

第Ⅱ部は、考察目的を、「第二次世界大戦前における国際貿易のネットワークの型を描くとともに、それがどの程度、資源の賦存状況によって規定され、どの程度一過性の、あるいは容易に変更可能な要因によって規定されていたのかを考察すること」（135 頁）に置いている。第 10 章で分析方法を説明し、第 11 章から第 13 章まで世界貿易の構造と決済の流れについて検討し、最後に第 14 章で 1930 年代の多角的貿易とその決済構造の特質を究明するという構成をとる。以下、要点のみを確認していく。

(1) まず貿易の拡大は、先進工業地域から放射状に拡大していく傾向があることを指摘したうえで、ヨーロッパを中心とした世界貿易の分布を確認する。1938 年時点での世界貿易総額（輸出入）に占める各地域の割合は、大陸ヨーロッパ工業国 46%、非大陸ヨー

ロッパ（主にイギリス）28%、アメリカ合衆国（23%）、日本 7%であった。合計すると、この4地域で89%にも達し、残り地域がわずか11%に過ぎなかった。

(2) 次に、個々の商品の輸出貿易が一定地域に集中していることを確認する。例えば、ジュートの99%はインド、天然ゴムの91%、ココナツ油の81%、錫の55%、コプラの75%は、それぞれ東南アジアが占めている。また、亜麻仁の80%をラテン・アメリカの非熱帯地域、絹の78%を日本がそれぞれ占めている。

特定商品輸出が一定地域に集中する要因は、自然条件、鉱物資源の賦存状況、気候や交通の利便性など自然的特性に起因するところが多いが、より重要な要因として、労働力、資本、肥沃な土地が不均等に存在していることを挙げている。例えば、イギリスやヨーロッパの工業国は、資本が豊富であるものの肥沃な土地が少ない。アメリカ合衆国は、労働力が少ないが土地と資本は豊富である。イギリス自治領やアルゼンチンなどは、広大な肥沃な土地と豊富な労働力があるものの、資本や設備が少ない。このように、自然条件、土地、労働力、資本の賦存状況は、各地域の貿易特性を規定する。イギリス連邦、アメリカ合衆国、ラテン・アメリカは資本が豊富であり、多様な資源と気候によって主要な原料の輸出超過を生み出している。ただし同地域の輸入については、輸入超過を誇張しすぎている傾向があった。

(3) 一次商品に対するイギリスとアメリカ合衆国の関係は、競合的というよりも補完的であった。イギリスは、大量の食糧、綿花、羊毛、亜鉛等を輸入するが、アメリカ合衆国は、それらをほとんど輸入していない。他方、アメリカ合衆国は、絹、バナナ、コーヒー、油脂、錫、ゴムを大量に輸入するが、イギリスはほとんど輸入していない。ただし両国とも大陸ヨーロッパとはかなりの程度競合関係にあったことに留意している。

(4) こうした一次商品の特定地域への集中は、双務的貿易関係を創り出しにくい状況を生み出しているが、それは、一次商品の輸出国・地域は輸出先を多様化するが、輸出先から同程度の輸入を行えない状況によるものである。このことが、多角的決済を可能とする状況を生み出すと指摘している。

(5) 各地域についてみると、熱帯地域は、アメリカ合衆国への輸出を40%占めているが、同国からの輸入は20%に過ぎない。アメリカ合衆国の輸出先は、主にイギリス、大陸ヨーロッパ、そしてイギリス自治領であった。イギリスの場合、熱帯地域は輸入先というよりも輸出先として重要であった。主な輸入先は、イギリス自治領、大陸ヨーロッパ、アメリカ合衆国で、3地域からの輸入は大幅な入超であった。しかし1938年にはイギリス自治領と大陸ヨーロッパが50%を占めているものの、アメリカ合衆国の割合は大幅に下落した。

(6) 1938年において、大陸ヨーロッパは、域内からの輸入52%、輸出57%を占めていたが、非大陸ヨーロッパ（主にイギリス）は、大陸ヨーロッパからの輸入34%で、同地域への輸出18%であった。この大陸ヨーロッパからの輸入超過は、大陸ヨーロッパの

一次産品地域からの輸入超過の決済を可能とする決済循環を可能にしていた。

(7) その他の地域についても、同様の輸出と輸入の不一致・多様化が見られた。例えばアフリカの輸出の80%は、ヨーロッパ向けであった（ただし南アフリカ連邦の主な輸出先はアメリカ合衆国）。カナダとニューファンドランドの主な取引先は、アメリカ合衆国とイギリスであったが、アメリカ合衆国については、輸入60%、輸出32%と、輸入先として重要であった。逆に、イギリスは輸出先として重要であった。ラテン・アメリカの熱帯地域は輸出入ともアメリカ合衆国に大きく依存したが、非熱帯地域（特にアルゼンチン）は輸出先をヨーロッパ、輸入先をアメリカ合衆国に依存した。

またインドは、輸出先が全世界であったが、輸入を大きくイギリスに依存していた。東南アジアは、主な輸出先がアメリカ合衆国、輸入先がヨーロッパであった。オセアニアは、輸入先としてアメリカ合衆国が重要であった。さらに、日本についてみると、1928年から1938年の間に輸出先をアジアに移行し、ここに集中した。軍事力により満州・香港を含む中国を半独占市場と化し、円ブロックとして囲い込んだ。アメリカ合衆国との関係では、輸出が42%から18%へ下落し、輸入は28%から34%へ上昇し、対米貿易収支を出超から入超へ転化させた。円ブロックが輸出超過による外貨獲得をもたらさなかった点に留意する必要がある。

(8) 以上のような輸出先と輸入先の相違があることを確認したのち、その不均衡な貿易決済がいかなる方法で可能となったのかについて検討している。これまでの研究を踏まえて、小規模な三角的決済関係にとどまらず、単一の多角的貿易決済システムに統合され、迂回的ルートを通じて債務国から債権国（特にイギリス）に利子配当等の支払いが行われてきたことを確認する。その貿易決済システムについて、世界貿易の9割を占めるグループを(1) 熱帯地域、(2) アメリカ合衆国、(3) 温帯地域の新入植地域、(4) 大陸ヨーロッパ、(5) 非大陸ヨーロッパにグループ分けをし、1928年の場合を図25（246頁）で、1938年の場合を図29（267頁）でそれぞれ示し、貿易決済ネットワークの在り方とその変容を明らかにしている。

(9) 多角的貿易の変容・衰退を生み出した状況を確認するために、多角的貿易決済機構の歴史をたどる。同機構が生産と輸送技術の発達により1870年頃に誕生し、1900年初頭ころまでに徐々に拡大し、世界のほぼすべての国・地域を包摂したことを確認する。第一次世界大戦によって一次解体されたが、戦後アメリカの資本輸出に支えられて1920年代に復活するものの、1928年中頃以降、アメリカの資本輸出の減少と債権国（特にフランス）による短期資本の引き上げによって、再び機能停止に追い込まれた。国際収支危機に直面した諸国は、金の売却、海外に置かれている当座預金の取り崩しを余儀なくされた。1929年世界恐慌後金融ひっ迫が強まり、1931年の国際的金融危機の際には、多くの国々は、輸入制限という政府による規制強化によって対応した。この輸入制限は、当然のことながら差別的となり、決済を多角的ではなく双務的へと変容させた。多角的貿易は減少し、双

務的貿易が主流へと逆戻りした。多角的貿易決済システムの停止後、多くの国は、輸入代金の決済資金に窮し、原料購入が困難となった。他方、原料輸出国は、この需要減退により世界市場価格の低下を余儀なくされたため、経済悪化の悪循環に陥った。これに加えて、この世界市場価格の低下は、海外投資収益の減少をもたらすとともに、国際的資本移動の停止を引き起こした。このように歴史を振り返えながら、現況を確認している。

(10) 最後に、第二次世界大戦後の世界貿易を以下のように予測している。これまでと同様に今後も世界経済は全世界を包摂する多角的貿易決済システムによって動かざるを得ず、世界大戦とイギリスの海外投資の減少が多角的貿易決済構造の型を変容させる可能性があるものの、消滅することはない。戦争や通商政策によってシステムのゆがみは各国間の経済的摩擦を引き起こし、システムの機能停止に追い込まれる可能性はあると予測するが、「各国が通商政策を策定していくうえで、それが世界的規模を持つということを認識し、世界各地の相互依存性を考慮する必要がある。そうすれば、戦争によって貿易制限は速やかに撤廃され、貿易が盛んにお紺われる平和な時代が訪れるであろう」(140-141 頁)と、締めくくっている。

以上から明らかなように、本著は、国際連盟が第二次世界大戦後におけるその体制再編への展望を示すために、両大戦間期（特に 1930 年代）の世界貿易及びその決済構造を分析したものである。

第一次世界大戦前の多角的貿易決済構造については、S.B. Saul, *Studies in British Overseas Trade, 1870-1914*. Liverpool University Press, 1960 (S.B. ソール (久保田英夫訳)『イギリス海外貿易の研究』(文眞堂、1980 年)) をもとにイギリスを中心とした世界決済システムの研究が盛んに行われてきた。また、工業化が世界貿易に及ぼす影響を明らかにした F. Hilgerdt, *Industrialization and Foreign Trade*, League of Nations Publication, 1945 (F. ヒルガー ト (山口和男他訳)『工業化の世界史：1870-1940 年までの世界経済の動態』(ミネルヴァ書房、1979 年)) も統一的な世界経済の具体像を明らかにしようとしたものであった。両大戦間期については、本著で取り上げられた国際連盟の史料を基礎的統計資料として研究が展開されてきているが、第 I 部は日本ではこれまであまり注目されてこなかったように思われる。その意味で邦訳によって内容を確認できるのは有益である。第 II 部について、既に多くの研究で取り扱われてきており、特に図 25 (1928 年) と図 29 (1938 年) の比較検討が注目を集め、その資金の流れの変容について検討がなされている。

しかし、本著では、第一次世界大戦後どのようにして多角的貿易決済システムが再建されたのか依然あいまいであり、主要ヨーロッパ諸国間の位置および緊張関係の変容過程を確認しにくい。また、第一次世界大戦前にはインドからイギリスに還流する資金（主に本国費）循環が重要であったことがすでに周知の事実であるが、両大戦間期においてそれが世界貿易においてどのような役割を果たしたのか明確に意識されていない。さらに、イギ

リスの自由貿易体制の解体によって経済ブロック体制へ転換していく過程で、スターリング圏の形成（特にスターリングバランスの役割）がいかなる役割をはたしたのかがわかりにくい。なお細かい点であるが、再輸出に随所で触れられているが、その果たした役割についても過小評価されているように思われる。

従って、本格的に検討していくためには、翻訳著では省略されている巻末の詳細な統計資料にも言及し、当時の各国の実情をさらに詳しく分析する必要があるだろう。貿易収支、資本収支、さらには国際収支の立場からヨーロッパ、そしてヨーロッパ内の主要国（とりわけイギリス、フランス、ドイツ）の動向、そしてアメリカ合衆国との関係を精査していくことによって、両大戦間期の国際貿易関係のみならず、国際秩序形成の変容過程を究明する手がかりを得られるものと思われる。いずれにせよ、原著を翻訳で読めるメリットは大きい一冊である。